人格の偉大性に関する心理学的研究

――（その２）特に，小学生と中学生による偉大性要因の比較――

藤　田　主　一

Ⅰ．研究の背景と目的

Allport, G.W. は「人格とは，個人の特徴的な行動や思考を決定づける個人内のダイナミックな精神身体的なシステムである」と定義している。ここで主張している「ダイナミック」とは力動的ということであり，また「精神身体的システム」とは個人に内在しているさまざまな組織や体制のことで，それらは相互にかかわり合い，決して切り離すことができない体系である。人格は個人の背後にある一貫した行動様式を総合的に示している概念である。人が日常生活で他者の個性を認知し，また他者との関係を円滑に遂行していく上で欠かせないものは，個人を構成している人格（個人の全体像であり，特定の性格のように価値基準のみで形成されている狭義の概念とは異なる）を的確に把握することであろう。

本研究は，人格研究の中で特に『人格の偉大性（greatness)』を構成している種々の要因を明らかにすることを目的にしている。『偉大性』という概念は，通常「偉い人」や「立派な人」などといわれる個人を構成する要因を指すものであるが，必ずしも明確な定義が存在するわけではない。ある人は「艱難辛苦を乗り越えて立派な業績をあげた人」を思い浮かべるだろうし，他の人は「良識のリーダーシップを発揮して国家国民を治めた人」や「弱者を思いやる気持ちがある人」を持ち出すだろう。『偉人』や『偉い』の意味は「偉人＝偉大な人，すぐれた人，大人物」，「偉い（人)＝すぐれている（人)，人に尊敬されるべき立場にある（人)」という解釈が一般的であるが，「非常に立派な仕事をした人」「すぐれた能力，性格などを備え，偉大な業績を成し遂げた人」「世のためになるような立派な仕事を成し遂げた人」という解釈もある。今日まで，主として欧米の研究者たちが，知性や業績の傑出，性格や活動の高揚，社会的名声や貢献の拡大などの事実から，偉大な個人を生み出す背景を明らかにしようとしてきた。そこでは，傑出した人＝偉大な人＝偉大性という学問的確証は得られていないが，彼らが何らかの偉大な人格を保有していた可能性も否定できない。ここで問題になるのは，私たちが特定の他者を「偉大な人」または「立派な人」と評価する基準，「偉大な人格」が形成されるメカニズムや発達の諸相などを

研究することである。歴史的な偉人・天才の研究も同様である。

筆者[1~5]は，『偉大性』を評価する40項目の質問票（**表1**）を作成し，これらを用いて検討してきた。項目の選定については，大学生を対象とした予備調査の結果に基づいている。自由記述によって「偉大な人」または「偉い人」を指し示す表現を収集し，得られた記述を類似性の高いものでまとめ，仮説的ではあるが『偉大性』の5因子（BASIC）構造を想定した。

(1) 行動の基準と努力……「達成行動の強さ」因子……Behavior

(2) 仕事や業績……「知名度と高業績」因子……Achievement

(3) 社会や家族への貢献……「社会活動の貢献」因子……Social contribution

(4) 知的能力の高さ……「知的能力の高さ」因子……Intelligence

(5) 性格や人柄……「性格や良い人柄」因子……Character

本研究では，小学校高学年生と中学生を対象に，他者から「偉いね」と評価された体験を基準にして，思春期段階での『偉大性』の一側面を5因子仮説との関係から明らかにするとともに，学年間の類似性と異質性を合わせて検討することが目的である。

表1 『偉大性』に関する40項目の質問票

1.	一生懸命に努力する人	21.	ルールや決まりをきちんと守る人
2.	発明や発見をした人	22.	立派な成績や記録を残した人
3.	家族のために行動する人	23.	社会に役立つことをしている人
4.	頭のよい人きちんと言える人	24.	賢い人
5.	心がひろい人	25.	よく気がつく人
6.	自分の考えをきちんと言える人	26.	何事にもくじけない人
7.	社会で大きな仕事をした人	27.	ノーベル賞をもらった人
8.	自分を犠牲にできる人	28.	電車でお年寄りに席をゆずる人
9.	豊かな知識がある人	29.	すばらしい才能を持っている人
10.	性格がやさしい人	30.	がまん強い人
11.	何でも最後までやりとおす人	31.	何にでもチャレンジする人
12.	大統領や総理大臣になった人	32.	歴史の教科書にのっている人
13.	社会のためにつくしている人	33.	ボランティア活動をしている人
14.	物事をてきぱきと決められる人	34.	頭の回転が早い人
15.	真面目な性格の人	35.	誰からも好かれる人
16.	自分の夢を実現しようとがんばる人	36.	物事に真剣に取り組んでいる人
17.	世界的に有名な人	37.	本をたくさん書いた人
18.	困っている人を進んで助ける人	38.	世界平和のためにがんばっている人
19.	社会の出来事をよく知っている人	39.	すぐれた技術を持っている人
20.	責任感のある人	40.	思いやりのある人

II。研究の方法

1．調査対象者

(1) 小学生：埼玉県内の公立小学校児童，計 530名。

5年生 245名（男子 120名，女子 125名，平均年齢11.5歳）。

6年生 285名（男子 149名，女子 136名，平均年齢12.5歳）。

(2) 中学生：埼玉県内の公立中学校生徒，計 664名。

1年生 209名（男子 108名，女子 101名，平均年齢13.5歳）。

2年生 233名（男子 121名，女子 112名，平均年齢14.5歳）。

3年生 222名（男子 114名，女子 108名，平均年齢15.5歳）。

2．調査材料

(1) 『偉大性』に関する40項目の質問票（質問紙法として作成）を用いた。

回答は“非常にそう思う”から“全然そう思わない”までの5件法を採用した。

(2) 自由記述形式の質問票を作成した。

教示：『私たちは，よく「あの人は偉い人ですね」と言うことがあります。あなたが，誰かから「偉いね」と言われたことを1つ思い浮かべてください』

①それは，どういうことでしたか？

②その時，あなたはどんな気持ちがしましたか？

3．手続き

調査は，質問紙上欄の教示を読み上げる方法によった。調査材料(1)に関しては，40項目のそれぞれに対して5件法（“非常にそう思う”から“全然そう思わない”）の該当する数字に○印をつけさせた。調査材料(2)に関しては，①②に分けて自由記述欄に回答させた。

調査は，各学校の各クラス担任教師により教室単位で実施された。

III。結果と考察

収集された資料の結果処理については，調査材料(1)(2)ともに並行して実施したが，ここでは調査材料(2)の①②の結果を中心に述べることにする。

1．小学生による「偉いね」体験の分類

小学校5年生245名，6年生285名の児童総数530名が記述した「偉いね」体験の具体的記述内容（具体像）を，想定した「BASIC」仮説のどの因子に相当するかを分類した。**表2**は各因子

別の比率の結果を，**表 3** は各学年別と性別との有意差検定の結果を示したものである。

表 2　小学生による「偉いね」体験の分類　（頻度，%）

因子構造	5年生			6年生		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
達成行動の強さ（B）	14 (11.7)	15 (12.0)	29 (11.8)	22 (14.8)	23 (16.9)	45 (15.8)
知名度と高業績（A）	20 (16.7)	6 (4.8)	26 (10.6)	12 (8.0)	6 (4.4)	18 (6.3)
社会活動の貢献（S）	85 (70.8)	100 (80.0)	185 (75.5)	104 (69.8)	98 (72.1)	202 (70.9)
知的能力の高さ（I）	0	0	0	0	0	0
性格や良い人柄（C）	1 (0.8)	4 (3.2)	5 (2.1)	11 (7.4)	9 (6.6)	20 (7.0)

表 3　小学生による「偉いね」体験の分類と有意差検定　（頻度，%）

因子構造	5年生			6年生			有意差の検定				
	男①子	女②子	全③体	男④子	女⑤子	全⑥体	①×②	④×⑤	①×④	②×⑤	③×⑥
達成行動の強さ（B）	11.7	12.0	11.8	14.8	16.9	15.8	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*
知名度と高業績（A）	16.7	4.8	10.6	8.0	4.4	6.3	＊＊	*n. s.*	＊	*n. s.*	*n. s.*
社会活動の貢献（S）	70.8	80.0	75.5	69.8	72.1	70.9	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*
知的能力の高さ（I）	0	0	0	0	0	0	—	—	—	—	—
性格や良い人柄（C）	0.8	3.2	2.1	7.4	6.6	7.0	*n. s.*	*n. s.*	＊＊	*n. s.*	＊＊

＊ $p<0.05$，＊＊ $p<0.01$

(1)　各学年別，男女別においても「社会活動の貢献（S）」因子に相当する評価が顕著に高率であるが，学年差および性差は認められなかった。

(2)　「社会活動の貢献（S）」因子に含まれる内容を，さらに 3 分類することを試みた。その結果，“親や家事の手伝い”などに対して「偉いね」と言われる体験が多く（5 年生63.8%，6 年生73.8%），男子では 5 年生（54.1%）＜ 6 年生（76.0%）へ向かって急増している。次に，“他者への世話や援助”（5 年生27.0%，6 年生17.8%）が続いている。

(3)　「達成行動の強さ（B）」因子に相当する内容は，“自主勉強”“努力”“チャレンジ”などへの評価である。学年差および性差は見られない。

(4)　「知名度と高業績（A）」因子に相当する内容は，“100点”“賞”“成績”などに顕著な結果を示した場合への評価である。5 年生に性差（男子＞女子），男子に学年差（5 年生＞ 6 年生）が認められた。

(5)　「性格や良い人柄（C）」因子に相当する内容は，“礼儀正しい”“気がつく”などへの評価である。男子に学年差（5年生＜6年生），全体に学年差（5年生＜6年生）が認められた。

(6)　「知的能力の高さ（I）」因子に相当する内容に関して，「偉いね」評価を受けた具体例はどの学年，性別にも皆無であった。

(7)　「偉いね」体験により評価を受けた場所は，学校よりも家庭に多く見られた。

2．中学生による「偉いね」体験の分類

中学校1年生209名，2年生233名，3年生222名の生徒総数530名が記述した「偉いね」体験の具体的記述内容（具体像）を，想定した「BASIC」仮説のどの因子に相当するかを分類した。**表4**は各因子別の比率の結果を，**表5**は各学年別と性別との有意差検定の結果を示したものである。

(1)　小学生と同様に，中学生の各学年別，男女別においても「社会活動の貢献（S）」因子に相当する評価が顕著に高率であるが，学年差および性差は認められなかった。

(2)　「社会活動の貢献（S）」因子に含まれる内容を，さらに3分類することを試みた。その結果，“親や家事の手伝い”などに対して「偉いね」と言われる体験が多い（1年生71.6%，2年生71.9%，3年生57.0%）。男子では1年生＞2年生＞3年生，女子では1年生＜2年生＞3年生という結果になった。次に“他者への世話や援助”（1年生14.9%，2年生13.7%，3年生24.7%）が続いている。

(3)　「達成行動の強さ（B）」因子に相当する内容は，“自主勉強”“努力”“一生懸命”などへの評価である。3年生に性差（男子＜女子）が認められた。

(4)　「知名度と高業績（A）」因子に相当する内容は，“テスト”“成績”“合格”などに顕著な結果を示した場合への評価である。学年差および性差は認められなかった。

(5)　「性格や良い人柄（C）」因子に相当する内容は，“礼儀正しい”“やさしい”“正直”などへの評価である。3年生に性差（男子＞女子），学年間に性差（1年生女子＜3年生男子）が認められた。

(6)　「知的能力の高さ（I）」因子に相当する内容に関して，「偉いね」評価を受けた具体例はどの学年，性別にも皆無であった。

(7)　「偉いね」体験により評価を受けた場所は，学校よりも家庭や地域社会に多く見られた。

3．小学生の「偉いね」体験による感情の分類

「偉いね」体験における評価を通して得られる感情（気持ち）を設定したカテゴリを用いて分類した。**表6**はその結果をまとめたものである。分類のためのカテゴリには，「喜び」「疑問・否

表 4　中学生による「偉いね」体験の分類　（頻度，%）

因子構造	1年生			2年生			3年生		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
達成行動の強さ（B）	24 (22.2)	28 (27.7)	52 (24.9)	30 (24.8)	36 (32.1)	66 (28.3)	22 (19.3)	35 (32.4)	57 (25.7)
知名度と高業績（A）	3 (2.8)	4 (4.0)	7 (3.3)	5 (4.1)	1 (0.9)	6 (2.6)	6 (5.3)	1 (0.9)	7 (3.1)
社会活動の貢献（S）	75 (69.4)	66 (65.3)	141 (67.5)	76 (62.8)	70 (62.5)	146 (62.7)	74 (64.9)	68 (63.0)	142 (64.0)
知的能力の高さ（I）	0	0	0	0	0	0	0	0	0
性格や良い人柄（C）	6 (5.6)	3 (3.0)	9 (4.3)	10 (8.3)	5 (4.5)	15 (6.4)	12 (10.5)	4 (3.7)	16 (7.2)

表 5　中学生による「偉いね」体験の分類と有意差検定　（%）

因子構造	1年生			2年生			3年生		
	男①子	女②子	全③体	男④子	女⑤子	全⑥体	男⑦子	女⑧子	全⑨体
達成行動の強さ（B）	22.2	27.7	24.9	24.8	32.1	28.3	19.3	32.4	25.7
知名度と高業績（A）	2.8	4.0	3.3	4.1	0.9	2.6	5.3	0.9	3.1
社会活動の貢献（S）	69.4	65.3	67.5	62.8	62.5	62.7	64.9	63.0	64.0
知的能力の高さ（I）	0	0	0	0	0	0	0	0	0
性格や良い人柄（C）	5.6	3.0	4.3	8.3	4.5	6.4	10.5	3.7	7.2

	①×②	④×⑤	⑦×⑧	①×④	①×⑦	②×⑤	②×⑧	①×⑤	④×⑦	⑤×⑧	③×⑥	③×⑨	⑥×⑨	①×⑧	②×④	②×⑦
B	*n. s.*	*n. s.*	*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*
A	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*
S	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*
I	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*
C	*n. s.*	*n. s.*	*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*n. s.*	*

* $p<0.05$

定」「冷静」「進取」という 4 種類を取り上げた。

(1)　各学年，男女別を問わず，圧倒的に「喜び」の感情が表出される（5 年生全体82.8%，6 年生全体75.4%）。「喜び」の感情は“うれしい”“よい気分”の 2 種類に別れるが，前者（うれしい，うれしかった）の方が高率である。

(2)　小学生は「偉いね」体験を受けると素直に喜びを表出するが，さらに頑張って再度の評価を得たいと感じている。これは「進取」の感情であろう。

(3)　5 年生から 6 年生へ向かうにしたがい，「疑問・否定」（当たり前のことをしたまでだ，べ

表6　小学生による「偉いね」体験による感情表出の分類　（頻度，%）

感情の表出	5年生			6年生		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
喜び（うれしい，よい気分，など）	104 (86.7)	99 (79.2)	203 (82.8)	116 (77.8)	99 (72.8)	215 (75.4)
疑問・否定（当たり前だ，偉いと思わない，など）	7 (5.8)	10 (8.0)	17 (7.0)	12 (8.1)	21 (15.5)	33 (11.6)
冷静（よいことをしたんだ，など）	3 (2.5)	9 (7.2)	12 (4.9)	15 (10.1)	12 (8.8)	27 (9.5)
進取（またしよう，もっと頑張ろう，など）	6 (5.0)	7 (5.6)	13 (5.3)	6 (4.0)	4 (2.9)	10 (3.5)

つに偉いとは思わない，など）の感情（5年生全体 7.0%→6年生全体11.6%）や，「冷静」（自分はよいことをしたんだと思った，など）の感情（5年生全体 4.9%→6年生全体 9.5%）が高まる傾向にある。「偉いね」体験でほめられた内容に疑問をもち，当たり前と感じている行動を周囲が強調する意味を，冷静に判断しようとする傾向と思われる。興味深い結果であり，これは自己の行動を客体化しはじめた心理といえよう。

4．中学生の「偉いね」体験による感情の分類

小学生の場合と同様に，「偉いね」体験における評価を通して得られる感情（気持ち）を設定したカテゴリを用いて分類した。**表7**はその結果をまとめたものである。分類のためのカテゴリには，「喜び」「疑問・否定」「冷静」「進取」という4種類を取り上げた。

表7　中学生による「偉いね」体験による感情表出の分類　（頻度，%）

感情の表出	1年生			2年生			3年生		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
喜び（うれしい，よい気分，など）	80 (74.1)	72 (71.2)	152 (72.8)	80 (66.1)	83 (74.2)	163 (70.0)	82 (71.9)	68 (62.9)	150 (67.5)
疑問・否定（当たり前だ，偉いと思わない，など）	12 (11.1)	14 (13.9)	26 (12.4)	23 (19.0)	14 (12.4)	37 (15.9)	12 (10.5)	25 (23.2)	37 (16.7)
冷静（よいことをしたんだ，など）	11 (10.2)	12 (11.9)	23 (11.0)	15 (12.4)	10 (8.9)	25 (10.7)	18 (15.8)	14 (13.0)	32 (14.4)
進取（またしよう，もっと頑張ろう，など）	5 (4.6)	3 (3.0)	8 (3.8)	3 (2.5)	5 (4.5)	8 (3.4)	2 (1.8)	1 (0.9)	3 (1.4)

(1)　中学生の各学年，男女別を問わず，圧倒的に「喜び」の感情が表出される。これは小学生の場合と同様である。「喜び」は“うれしい，うれしかった”という表現（1年生全体51.7

%，2年生全体48.5%，3年生全体50.0%）の方が，“いい気分，よかった”という表現よりも出現率が高い。また，素直に“うれしい，うれしかった”という回答は各学年ともに，男子よりも女子に多い。性差の現れかもしれない。

(2) しかし，全体的に「喜び」の表現は小学生よりも中学生にその出現率が低く，小学校5年生＞小学校6年生＞中学校1年生＞中学校2年生＞中学校3年生のように減少していくのが特徴である。素直な喜びと，進取的な気持ちを高める傾向は，思春期が進むにつれて下降するのであろうか。この点は今後の検討課題である。

(3) 中学生は，ほめられた事実に疑問をもったり，反対に“うれしくない”と反発する傾向も高い。反抗期的な心理とも受けとめられるが，“当たり前のことをしたまでである”と思っている行動に対して，周囲の特に親がことさら大げさに強調して自分をほめる意味を，一種の批判をもって冷静に判断しようとする点は，思春期の心理として理解できる。

Ⅳ．要　　約

以上の諸結果から，小学生と中学生を対象にした「偉いね」体験・評価の具体像は，おおむね次のように要約されるであろう。

(1) 小学校5年生，6年生による「偉いね」体験は，『人格の偉大性』に関する「BASIC」仮説のなかで，「社会活動の貢献（S）」に相当する内容が多い。同様に，中学校1年生，2年生，3年生による「偉いね」体験も「社会活動の貢献（S）」に相当する内容が顕著に高率である。

(2) 「社会活動の貢献（S）」は，他者との関係のうえに成立するため，その行動は他者に満足が得られること（特に親が喜ぶこと）が前提であり，それが評価の対象となる。この傾向は小学生も中学生も同様であるが，小学生と比較して中学生に低いことが特徴的である。

(3) 「知名度と高業績（A）」は，特に業績（テスト，成績，賞など）が認められた場合に評価され，その維持向上のために「達成行動の強さ（B）」が求められる。即ち，“努力”“一生懸命”“自主的な勉強”などである。これらは，小学生，中学生ともに共通である。

(4) 「知的能力の高さ（I）」は，単なる知的個人差が他者に評価されないこと，努力に比べて素質的な現状は評価されにくいことを物語っている。

(5) 「偉いね」体験・評価によって表出される感情は，“うれしい”に代表される「喜び」が最も多いが，小学生から中学生へと学年が進むに従い，評価を「冷静」に受けとめながら，「疑問・否定」を表出する傾向が高まる。

〈参考文献〉

1) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因について」．1996，日本応用心理学会第63回大会発表

論文集.

2) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてII」. 1997, 日本応用心理学会第64回大会発表論文集.

3) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてIII」. 1998, 日本応用心理学会第65回大会発表論文集.

4) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてIV」. 1999, 日本応用心理学会第66回大会発表論文集.

5) 藤田主一：「人格の偉大性に関する心理学的研究――（その１）特に，児童による偉大性要因の分析――」. 1999, 城西大学女子短期大学部紀要第16巻第１号.